「おふでさき」の有機的展開（20）

第三号：第九十二首～第百五首

おやさと研究所嘱託研究員
深谷　耕治　*Koji Fukaya*

第三号の九十二首からの歌は、街の雑踏を眺めていると自然と感覚される。「世の人は賑やかに暮らしているけれど、この世の初まりを知っている者はいない」（三号 92）。当然、街の人の多くはなぜ世界が始まり、人間がどういう思いで創られたかということに関心を持っていないだろう。

しかし、それでいて行き交う人のなかには心身を病んでいる人が大勢いる。「この世の初まりを詳しく知ったことならば、病が起こるということはないのに」（三号 93）、「何もかも知らずに暮らすこの子供たちが、親神の眼には不憫でならない」（三号 94）。心身を患いながら行き交う人々を気の毒に思う親神の視点が感じられる。

それでは、なぜ身体に不調がきたし、病というものが起きるのであろうか。「どんなことでも病というものはない、病があるのは心の使い方が違うからである」（三号 95）。ここで心には使い方があることが示され、神が望まれる使い方と違えば、それが身体の不調に現れると述べられている。そして、「この心得違いの道には、惜しい、欲しい、我が身可愛い、欲、そして高慢があり、まさに埃のようなものである」（三号 96）と具体的に示している。チリも積もれば山となるように、例えば最初は些細な「惜しむ気持ち」が知らず知らずのうちに心にこびりつき、ついには「何もかも面倒くさい」と全ての活動を止めてしまう。そのように欲しい、腹が立つ、憎いといった心が親神の心に適わず、そのような心使いを映じて本来良好な身体も不調になる。「この世の人間はみんな神の子供である。神の言うことをしっかりと聞き分けてほしい」（三号 97）、「心の埃さえすっきりと払ったことならば、そのあとはこれまでにないような珍しい人だすけをする」（三号 98）と、心使いを改めれば病は治り、問題は治まると端的に述べられている。

ところで、この世界と人間を創造した神が人間に請け負う「これまでにないような珍しい人だすけ」とは、病の治癒だけではない。「このたすけは願う人の心次第である。その誠意が親神の意に添うならば、病まず、死なず、弱らずに暮らすことができる」（三号 99）と歌われ、さらに「人間の命を百十五才に定めたい、それが親神の心である」（三号 100）と述べている。

病まない、死なない、弱らないとはどのようなことであろうか。一般的に仏教で言われる生老病死という四苦を踏まえると、まず、病と死の苦がないことがわかる。「みかぐらうた」で「病むほど辛いことはない」と歌われているように、まず、病まないことは幸ある暮らしの必須条件である。さらに「おふでさき」は、人間の命を百十五歳に定めて、そのときまで不慮の事故や老衰などで死ぬことがないと述べている。そして、弱らない。つまり、百十五歳までの間、人や医療機器の世話になりながら延命するのではなく、弱らずに達者に暮らすことができる。それが病まない、死なない、弱らない暮らしである。

同様のことは第四号にも記されている。すなわち、「[たすけの準備が整った] その後は、病まず、死なず、弱らずに、心次第にいつまでも生きてよい」（四号 37）、「そればかりでなく、年限が経ったことならば、年寄りになるということもない」（四号 38）と詠われて、いつまでも若々しく暮らせることを述べている。また、上田嘉成氏によれば、「百十五才を過ぎたら、次は三百六十才まで置いて下さる。三百六十才を通り越したら、それから先は二千年でも三千年でも置いて下さって、しまいには、年齢がいくつになったか、分からなくなる程置いて下さる」という先人の話も残っている。このような命のあり方を親神は人間に味わわせてやりたいと念願しているのである。

ところで、そのような親神の望みを知ったとき、私たちには「それは夢物語ではないだろうか」と思う感覚がある。その話が自分の常識からあまりにも掛け離れて、現実を超えたファンタジーに近づくからである。しかし、それならば私たちは、そもそもどの程度「親神がこの世界と人間を創った」という話を「常識」とし、「現実」と考えているのであろうか。「この世の人間はみんな神の子供である」という言葉は「当たり前」であるのか、否か。「心使いを改めれば、病は治る」という言葉は、「事実」であるのか、否か。そのように自分の胸に真摯に問うとき、親神の言葉を「丸ごと」受け取る努力を怠ってはいないかと反省せざるを得ない。

そのように疑う人間の心を見透かすように、「おふでさき」は続けて「日々のなかで、神の心が急いていることを、そばにいる者はなんと思っているのか」（三号 101）、「上に立つ人々を恐れて引っ込み思案になっているが、神が急いているのだから、少しも恐れることはない」（三号 102）と詠われている。今日的にいえば、神の言葉を丸ごと受け止められない我々への、また歴史的にいえば、当時の地方官憲や世間の誤解にさらされていた先人たちへの励ましの言葉と解することができる。

ところで別の問題として、病まず死なず弱らない暮らしを想像して、今日のどれだけの人がその暮らしを理想とするだろうか。それはその生活に現実味があるかどうかという問題ではなく、そもそもそれを「夢物語」として受け取るかどうかである。病気もなく、不慮の事故にも合わず、弱ってもない人々が生きる意味を失っている現代社会である。生老病死でいえば、現代では生の苦の問題が迫り出しているといえよう。

「おふでさき」は続けて、「胸が悪くとも、これを病と思うなよ、神の急ぐ心が胸につかえている徴である」（三号 103）、「だんだんと神の心というものは、人間が不思議だなあと思うことを現して、人だすけを急いでいる」（三号 104）、「この不思議というものを何のことだと思っているかもしれないが、心の埃を払って掃除をするということだ」（三号 105）と歌っている。

「胸が悪い」というのは心臓や肺など具体的な胸の病気を意味する一方、『注釈』によれば、「胸がつかえて気分が悪いような事」とも捉えられ、広く気分が悪いことと解することができる。すなわち広義には、生きる意味を見出せない者の胸の内をも表しているといえよう。そしてそのように「気分が悪い」のは病ではなく、「早く人間をたすけてやりたい」「人間が不思議だなあと思うことを現してたすけてやりたい」と急く神の心が詰まっていることの表れとされる。

思えば、私たちが何か「不思議だなあ」と感じるその瞬間、それがどんなに小さなことでも、そこには生の意味が見出させるのかもしれない。